

生涯学習ニュース

駅伝今昔物語

九月五日(土)、開村百二十年記念第四十八回村内一周駅伝競走大会が開催され、十三チーム六十五名のランナーが出場しました。

今さら言うまでもありませんが、駅伝競走は、数名が長距離をリレー形式で走り、バトンの代わりにタスキを使用します。公道使用上の制限から、遅れが大きいチームは、前の区間の走者が来る前に予備のタスキを使い「繰り上げスタート」を余儀なくされる場合があります。

本村の駅伝大会は、昭和四十三年、村陸上競技協会創立十周年を記念し、第一回大会が開催されました。約三十六キロメートルを七区間(七名)で走るコースで、スタート・ゴールは北二号道路の役場前でした。その後、交通事情から役場裏発着となり、平成十九年第四十回大会からは、北二号道路で南北を分断し、「南コース」と「北コース」を設け、区間も七区間から五区間へと短くなりまりました。

陸上競技人口の減少から、選手集めに苦労しているチームもあります。が、マラソンブームの影響もあってか、いわゆる「市民ランナー」…大人の参加が増えました。一時期は「中

学生と高校生の大会」とかと思う時期がありました。



昔のスタートの様子

初の女性ランナーは？

女性の初参加は、平成四年第二十五回大会が最初でした。石狩中央信用金庫(現・札幌信用金庫)チームで、二区に宮本さん、五区に黒沢さんが出場し、大会を盛り上げてくれました。

(村広報平成四年十月号の表紙を飾りました(右下))



石狩中央信用金庫 宮本さん

つなぐ

四十八年間で、延べ四千六十四名の選手がタスキを繋ぎました。汗でベタベタになったタスキには、様々な想いが込められています。繰り上げたスタートによりタスキを繋げなかった人が何人もいました。アクシデントにより途中棄権し、タスキを繋げなかったチームが四つありました。すぐそこに中継所があるのに…リタイヤ…昭和五十二年第十回大会の出来事でした。

残念と悔しさ…それぞれの想いは次回大会へと繋がれます。

今年

今年には最終五区でドラマがありました。先頭と二位の抜きつ抜かれつのデットヒートが展開されました。結果は、三秒差で第二中央Aチームが四年連続七回目の優勝を飾りました。

優勝 第二中央A

準優勝 新篠津アスリートクラブTwo

第三位 第一キングス

区間賞 山元亮平、有波正人、

安藤萌生、安藤葉生、安藤芽生

敢闘賞 海野桃香、安藤薫生



優勝した第2中央のメンバー

地域づくり・人づくりは、各行事に参加し、人と人がふれあいをもち、交流を深めることから始まります。駅伝も、タスキが人と人を繋げてくれます。

本村の「地域づくり・人づくり」の行事として永く続くことを期待します。